連歌

へ利 5
2.9/2

[illegible]のこゝろの[illegible]
[illegible]

勝見紀三之丞殿 正月吉日
保頼寺[illegible]

此書賦 弄昌次座

一　永禄六年十二月廿四日

三條西實枝 号梅玄院 不附入道　為二七日御追善　紹巴

出しく梅乃跡なき世代ひらきけれ

年ことの花乃さかりハ見ぬめくり逢乃人ハ

今歳なれ・梅手花ちりくもほくを

なほ成りしむしつゝ後をかはらぬなり

いたつらに根ほとせし乃事にて梅花院

哥とりしこゝ平家物や

同わたし海山庭のよ花草

春の夢も一夜の河ゐしも

たつね心なるや梅玄院殿ハ飛鳥二百年

へ 5 2912

夢しらぬにも草むら庭上
をいゝと云人ありし季乃發句
勝にまた消ぬ月や
ひと乃鶏の聲すら霧乃露乃丸こそ
照る發句なれハとてよけれバしかも三人
さけたく出てまはるに詠まじとせ
かわりし跡と言ふもれ
庭草に山のあとすゞ虫の聲も露波のかゝ
見えてく我身気かなれ
羽風もさえ入一階てはえ
春かう清ぎ[illegible]山の鶏の聲なりけり

本臣こて詠なり四句の六句の八句の筆とハや
あくとあるへきあし逢ずましとすれぬ
永き夜乃枕まく秋乃風ありけり
東伯のまくハて飛雁ともまがふ我也
月ハ詠旅の記乃外なしき
かくてすて取り
詠まじと聲おやとなれひ
神のはしとしきて旅すびはたる人
聲は庭にまふるよ聲ひまする井に
やとこと云ふてすごしきて十八の句
ふきてもてしと申しまして面わかや

ひんがしになりて道いそぎなりゆ
紅葉の庵をさして見つけて跡ゆき居を定
あはれ見し日を暮し行て浮心隠
独君はわれにたもと結びし紛
吹けれしたつて雲風
紅風の外を憐かりぬ心紅の衣
小山をふかぬや浮橋をしして京にも
荒書言なき
言すれ尾まして何時雨て一そにかし
薄月をも時分しやと揚色哉吹てば深道
河波ち流てきる賤家乃栗

浦のこゑ音ふきそふなりけり
一村の竹の葉ずゑに風そよぎて
峯の雲川とにたる波にむかひて聞
出るや川辺の一村竹なるらん
秋のたよりぞ深くすにけむ
あくがれけるよしの御あそびなれ
深き心もすみぬる月の光
さだめてやまとにのかはにも八月十五夜
岩尾の雲出すなはれなん
もしもしらしの露そふらん 篇
深まりく吹たるなりそや

ふしきやこれは[illegible]ありてかく
花のえたは[illegible]葉が路を吹きて
しこうまいらせて[illegible]候へは
頭の上に候ひしか[illegible]数
鳶のきたりて宿をも[illegible]
新院[illegible]梅も細くさけりて[illegible]
宮は[illegible]こそ[illegible]
まうしさは[illegible]かけられ
御返事のなか
[illegible]心寺の[illegible]
[illegible]光来る

[illegible]
[illegible]
[illegible]信[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]信[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]寺に[illegible]
[illegible]
[illegible]

のしまきのなかに
ことはりもきかぬ眼もはなはだしん
理となさぬ眼を引つかまへ論の決すべき
ものを
いまとせよとかかりにおきたるす
三尺子の水の流を絶つ不毛世
兩國の眼をの流人に轉をしたる
三段によせにかけわれあるて名に
てに今を時にもわしとんとをもひしつる学
後者の眼にいろと一分に成時りあらはれる
我にもふ毎まはなて其まくし

太公望は玉の座にあかりて
唐土周国に天下和して云者の首陽山の中に
夷斉といひし二人の宮まいりあまたの年の
て不孝なりしを養ひてそのところのさ
ことにて此武王位に即たまふに文
こんの事か平生よみせしめ文王のやしな
養を文王の是をきく事のみも人参らは
親に孝の下に武王抱いて参らる事
こゝに文王位に即たまひしより天下泰平
道よ起こりて国おさまりて民の心もゆたか
こゝに時命ありしてより天下和平といふ

ひく頃すいしく海にのぞとり[illegible]
万葉集綴于　海によれは[illegible]
はなの[illegible]こかんと道て[illegible]
て[illegible]れわりし玉と于[illegible]てい[illegible]
かのゝり[illegible]
さ東更て海にて[illegible]
青たりしみと[illegible]
わる[illegible]入[illegible]
だしとや
[illegible]の[illegible]
[illegible]のまよ[illegible]

[illegible]
[illegible]
花[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
宗[illegible]霜[illegible]
山[illegible]の霜よ花[illegible]
[illegible]入[illegible]
[illegible]

草木心なき中にも竹の色殊なりし
はるなてこそすゝしとや
いはましに涼しき河ぬ大暑す
なほ涼しくも色の涼しき竹のさゝし
しらとなし
ある願にしへの家の中将の一首も
はるかにくもる夕露の一葉をめくらし
秋来ぬと目にはさやかに見えねとも
なからの家よ風の音にもおとろかれ
国のことも古ゝ行あかす人訪て
御阿りつ也いまはまさとなりて手をとても行ねん

御阿の月秋てる月ゆけ清きかな
しらぬ山之すゝしらも宿やかなる哉
いひや八園生のうゑよもあはれとして涼
はつとゝ此ちせつとれつらうて聲
そよりしてみゆみかたと山の
也阿桐のとほる風え中に夜半の
友船もしてくして今会華も鉄るの文
波風あらき此たさて峰わ阿の
いつきのりわかかのことと空
鶯の心をうけよ白妙の末の出して
鶯は梅のさきたるにはもやかや

穂にしも雨乃まき白柳し
小田のむらは尾花出て雪けしん
れつらなりし袖のうら風　かこ為友経
かくこゝろ尾花雲さそひし露の衣かへ
哀しきの袖のうら春とはつゆけし
まことに夜こそ衣をむすひてあきはつる心
真乃まことに学のは若のきはけさ
はるかにて衣清くあり白ねる雪の浦をとを
岩間もと庭のさ秋をほて月にふけたる哉
もろこしにもそ物の秋月
秋の月影乗乃わたしほる雪ともかくて似る

乃白須秋夜なて立ぬ入ゝる月かな鳥もし
はるとしもなりなつ鳥のおもの
桔梗かるとも葛葉をかへて立ち如き
さ羽康乃かけ野原乃ことけれ上
みるも綿よりもなしと庶の浦て秋鳴虫
も聲乃まとり露する葛原の秋こ
人なくむらそふ又らけ鳥の浦かる
翁ともなかにけるとの哀れなし
秋の〳〵駿錦乃夜にまて見さとし
うら三海の〳〵よりけ手すり共
そなかひて月は萩の露しめる萩そら

りんのとけくれ引ゆるとや

一字乃かはりとも侍らぬ人には詞
根こけら事のあやしくれよ筆
は記つゝさゝし根さしかし元ならしく
りよ詞なくてうちくし　但かゝ発句と
いふ名きこえ

うし詞のゝるさけいさに梅ゝつ
百花乃心元ならんには一笑はほしうさとゝ
壊かゝきとはてくる元なあさいとて字句
流てあるも芳しさへ入れる花
古き事としでて貴人もなかみ京のえいゝ子

折にて見すさん

濁忍成野を過し生國には梅か香
急誠りとかたれ蔵く

春乃来の梵月おはせとうて
野への杉にく

うらすま緑すや祁なうちもん
經来乃ころかゝ

すゝ風とて雪も山嵐水乃音
なるとてさらにやりつ經水寄子
下は霞の千とせをたちて

とやまぬ雨乃名残海こいゝ

手引し風乃音にさそはれて萱ふかき露
奥ゆかしき人のけはひの有様もし
やかたとは思はれし
人目はつかしき前栽にて
此とのおもて秋のけしきに露をまて
あはれなるを
よろつかし中にもまさりてあはれなる
源氏一乃巻は桐壺也あまりの御
むくとまれはそましつて涙ふる風
前栽はまた人の心を見しもしも
けしきにけしきたる心まて[illegible]

女はくちめかとりけり人の袖はぬるやといふや
こころはか涙にふれて萩の葉
萩の葉の色の枝をまて萩の露をは
袖をぬらし人目をしのぶね
月は涙のうきき波野はけく
涙萩のまよふ浪の様への萩の露を添
深きも童にて秋萩の露
とはて見渡すなれ
袖は涙にしほるゝやわれもまた
風やはらかにや
奥山にこの世の外の秋やかねてむ

ひ辰けりも現なきにて底にあらすとて やま
やさきは方り形て幽梅とちらりて
いろえの風とも世のいと[illegible]
前数の異し花のちらんはや
昔日中の鏡乃き記しき
とし候乃あられとのさまふ日よ
話き源こ留もと[illegible]り鏡の鏡に
つまされし帰りや
心のゝ記もひ海よりのうさ
利根と紫て地根ま八去くとよろこ 露
いまけなきまからし人のあはれそ絶て

心とく修すり人乃あはれよ初の事接す
然会をうこひ[illegible]ら御へ
かく川乃たもむ乃袖も かぬる
源氏しかの巻より京都乃鷹のかれ
とりのすく絶難六位すくりてはて
鳥もはのきこしも冒無期を候
あしまそうしたのちかとかはれ
りせ乃中うめしけまきひとせ
すこしは者[illegible]れらして国[illegible]かや
は[illegible]し [illegible]葉[illegible]ていうて袖の色
此の[illegible]もしやいはちとくさうさ[illegible]

と宣へし色々に耳乃うきこ瑕めあ
包めるゝことに深き井代をとの経をる
ぬれ居いかゝゑれいとられ後て八字あ
頼ぬれ代りて何の奴
宣りや清かきいは庭のには亡て
六位の称居とせし人数信をいふ誌
下人いつか平に滝之丸とさ派き經い
昔からくはつらく人の衆をするやらく
の形とれよ成てい元乃ごとくに成や
うふきもようさいひれ鶴の一点
鷄乃子の雲井へ飛られしもねぇい

きこえ庭さへとかはるせや
宮居稲かきのあなもゆかりある 今日
猶乃かへさま萩葉なりやね 雨もの霜如
なりけりやむかしはるかなるにも
見はきつおもう御欄の蔭をもとらく
らくつらくの庭れなれ秋やのころ
ときもてふりて春やはやれい夜と萌のこ
御葉のちとちゝふ
あさきも冬よ月川風乃音せ
二秋乃菓居り見るもさ成くし
月夜乃かりつまさはれて雲

雨の後乃月みるにひかる事なし
こゝろは枕はかりの夜はけさへ
ゆふしまふこゝに山乃旅寝せんとおもへり
月の末の末てそ　以降[illegible]
都に春はあらつるに帰るらん
まよひの衣のかけてそ[illegible]しんとや
友こそ人こそ袖そほちつゝ
まへの庭のかすみこゝに社在
中にはたかひて左右乃西東
わくにほとりて手向の花の露
友こそ人して手向の露は[illegible]

花の雪散る須磨乃浦へ
神よ手向しとも[illegible]
行舟は風乃海へと[illegible]して
まかりしの夜そ杜若のかや
菖蒲こそとしま真の浦乃海
[illegible]
日乃色も雨ふりしより落日を
[illegible]
鳴くよ心の木の下
雨[illegible]
古袖[illegible]

古柳の松たしれ林たしの下木ハ鶴の
友をよふ聲のすさまし夕暮
塵わるくかよふ人影もなし 葛白
すゝしき方をすそんといふも道理
おのし塵にちりまかし人けもせねとも
ましの錦の後をもなすわ
伊勢物語すてんいと方きとりふまた
まつひのまに如わしてや瀧川流て
錦をあひとあかをたつふいふわの窮とて
淀なわいそのか眺しるてにしき
めにつまいさめしそも明けひらて

あしみし昔をあのの錦すまふかたとや
うそら錦やよへわるり中人
たつら錦のとやのいさめしらす錦ハ龍
田の時のちさらそまけれ此河錦
よいふりはとさをすしはらかん錦もをぬ人の心
東の錦をも是わわかすれ
夜のしてひら錦すたゝ人の術なる
あくしありうるひ如く弟乃
伊勢物語す此宮ひとの國よりも毎
よこにつ哩ハとをりし後く帰りて
取文ハいとをかしうてそ衰かうさも

あかしくもはれまさり給ふ末の
花かかりし損まさるを御身
藤花損ふや
山の下その時は川沿の道
それは末この野のみ草かれの生葉に
けるあらのそことてなる

何船　第二　一　十首

あしかしもふと地はえの花
とさらしと思ふとものおほおりふしあて
りしとさへたしやそしと云ありく心へ
かなしかなしすのしのきさはおもほえ
おもしとおもしとおもひかくに
おもひ忘れたる心をましまして添ら
ぬかくしも發句すハ印字なくさして
人のる富まくしあとのおもひ侍
あるへかし
らん風のさきまてして月の秋の霜まま

一 花すゝきほのかにみえしと思ひ出也
鳴鴈秋の一しほてりそめしん
霧の内の花は見えるをあらはれさとこそ 野の道
飲香かぜ荒ふき吹かれては、
ひとしに寄るとみてなみなかゝ
凉しさとゝしく秋かぜ
風の凉しきかぜの吹く秋のまへ
野山の露すゝ袖のうるほし
すゝきおもへとも秋の錦を
床の上もたとたん萩なかん
よるの袖ぬれて袖の露

一 秋の野ゝ萩の錦を秋霜寺 鹿の音かな
秋の夜ふくるまで世の中ゝてとりひ付ぬ
友なきひとりぬ枕してよは 八つめ分の
燈火ありあふたゞしてしほ夜のおもひ
蛬鳴きて飲まむ友人と枕せいゝ明かしてさえ
いにしへ精の木の下の音
ふくとひとりき寄りおもへき鳴いて鹿鳴は寝覚
神は花のなは涌の居たゝの茎を
前の世いかしゝやみてとこ詞と卯の
花はとうあり。たゝめとみてあくて
精のまこと也

又露もしほ玉河の名
こゝろをとめて此のきしにかけてたれか花さ[illegible]
高野玉川の里 此外にも此玉川は格別也
きよき風のこゝろ身にしみて声おとしく
夕されば汐風こしてみちのくの野田の玉川千鳥鳴也
跡よりゆく折ふし小舟[illegible]
やよ風よいく一村の浦[illegible]
絵にかきしとおもふ此の[illegible]
ひまなくにしも月のうら[illegible]
いく一村の雲のはれまとて
又あらば陸奥の国の外の浜[illegible]

時雨ぬれ其国守月なりて殺生し
家にてかれ庭にてむごく枕
いまだかゝる枕をむすびとて時節をさだめ
色も更しつらきや後の世かけて
来世までと契りしに家はとかく[illegible]
ねらふや手負の内なるまし時ぬ[illegible]一件[illegible]
[illegible]
佛の御名をいふ事ゆゑまよふ
すゑの狩人あはれと[illegible]
ねがはくも殺生してゆけば[illegible]
世の中の[illegible][illegible]

氏又かの君の面影と　侍従(?)かくこそ(?)
顔(?)はけり鳥の哀れなりそみけれはさらし
すや雨もとてわこなれ旅になね(?)
涙くれこそ由ゆ(?)れ尼(?)の心すく
紅(?)ぬ苦行にいふも只中かれ成とや
こん何ぞ猶(?)涙に経(?)尼しと
も借礼(?)がの御(?)や
我(?)袖しけさえは我(?)の雪
言葉に成まて我身に猶(?)に尼も
尼りしとたれしとそりふ心すく
時(?)けしとれに涙くも心尼年に(?)しとや

かゝるさいごまよ心はあさからて
去りし心にし心らはまて悪(?)ず　語(?)
今(?)の絶たしたくんかりし
別(?)流のうきより悪心と見て前と
拾(?)んとや浮(?)成(?)女(?)下にゆ面影かさねて
おやよ身の川まの哀らきれや　そこ等(?)
行末のすゑを別をせぬを遊(?)ぬなる(?)へも
すまりしと此も哀つき流れの(?)
伴(?)瑠(?)瀬(?)を絆(?)かや
全(?)念つ行(?)猶(?)の面かけ
赤(?)く中しつく御(?)へ返(?)にて御家と来(?)さ

柳樽も招つゝいかにけり
見えぬる世に梅はさゝまぜて所の春
柳残りわ此家乃詞歩や風わ白如く
小川乃かしはかにうゝ出雲雨より
やさしは字まで梅子あへしらはぬ江通れ
みよ柳はなも招てゆるゝ梅くしや
かえり鳴なる花の香をさま田　若湘留堂
さき乱しさ哉若鳥ゝ唐此国にして
独夜とらあはれ
五三句めされまし下所
猿人とと絶えかくの秋の体

風もめ乃猿人をと徳行や
夢路たのもさむし御乃露
猿人とと申なし如きとも世に絶えく徳心や
取り見ても小やき枕引まされて
旧枕故食長根前綱て　旧枕食新と共に　是よ成行ねむまゝ
添もて早しにたのしくし悲心旧遊も恋
よ成ねば仏一住句也
かつぬねむしなにもあら　化玉庵
ゆ川ともふ心のえ紳よ扇いしし世
ぬ卿筆此をこれや　于朔月今日　于時元禄…秋
昔清見原天皇吉野の宮にて…

此日の暮まて琴を弾して御心をなくさ
琵琶をひきならしつゝ山の色をまさりやある
しき雲さらのたなひきしかは御詠にけにもえ
まつこの中に非女の楽所て明暮はしらすして
合てかなてけるとも清門のこゝろをひとしからすかとも
那京に行あひける人もなしときこえけれは
非女神楽諷舞をなし凡つかはれそうり
後くの節にもかれ候やうに時の御門家を
まうし始てしかとなるもし女さしのすゑもわか
とも被よまさくし女きしもとも　其いまた人
舞妓をはしめけり　　依正過

一声鳳管は秋のみ吹ならすともと絶の
谷志とゝしもめんはきよし女を三十て酒盛に家
ひくめゐのこてはしのゝゐゝ志
並ひ繕ちて節の舞や三州のさうり
まつのむかし逢坂あふてと武自よ至て
武自の思ひいはぬ人なりけりにゆかしと見
こゝおも
勢多の橋のとゝろとふみならしとて
なかなかてをて渡りの下るまかけて
隈りては利ら馬の聲ちかさ思やよ
吉のまつりけれ寺のまちのさき

よき前の下にて
すゑなるかみに明雅の花は色
香のひかりは匂ひたにみゆる許にて香よ
蘭の二字は蘭二字も六行の御まへにこゆ
つてをかしとも羽目すは初めおもしろき
春の夜の名のて宗下ともいひて
みよあ花道そへまてその夏に如くし
竹の葉振りて風りふや桃も紅
海の流れの私の道より来て露しん
たけうち流れて毎も風まことに
行人もなき音は絶える道

ゆくなき身のうちに人々を雲中にこめやまなり
雲はれなく蓮生は佛の菩
入もなき手いと世の夜は露と代字を見たし絡
秋の色絶えん心当り尾は
遠くは秋なれ陰無いてとや
なつの夜もうきひとは霞をなけくよ
かきねの顔のあしぬ哀し長よに對して
夜の夜をけへなく到て悲川を乾や
八角てのてきを月ともなきけのて
深氏や三五夜へ指木の月無ひまにて沖の
ばよや言ぶれしかれし
両袖なくても田家よ
衣なしとかさのわ仮し

かすみよりては百首のうち
宮侍従弟に席の墨を首夜に百首と云
河北て侍り侍従のて侍らし須磨の浦
前句にて禁中の事　当句ハ源氏絵合也
の心や[illegible]よりて待更けて月に次
二ツの侍わく待にあきはや恋ハかく
侍ことよりよせてゆるや
鳥の野へよりとられ式題人
其私をよせ句はうまくれて浮舟の上臥
おまへ河辺や此君(?)すまて付句題とよ
とよ[illegible]のまて不知の人哉独吟千句にてゆる

此句は二ツ目にと云ものはんの思ひ
前は葉しあさきかはしのみ立て君よ
かくもなくて待えてはをとねたと
ちらの山のあらしたえ付一さ
前ハくれまてしとまちて山と風のはて
家にしと云れてあはれまさせ
風の夕部ニテといふかなしきおなし志ていふまじきとや
座もかよりて月くる萩也
萩虫ハなとおくハ[illegible]
秋の雨たてれてるものになりて
萩とえらるとゆしたる本にほ虫と云

となれり萩といふもよそにかくれまし
境といへり　月乃川波
なれは三紀に古木の枝を流るゝを
こゝ瀬も日のもと茂屋たに流らん
霜月乃嵐来　紅のもと風が下
りけ山寺も秋　雲にこもりて
雪もみよ心ぎれの身ちかさを流るなん
さまてしもとも　此　稲葉うらなひさ
稲葉ふ乃宮なれけるいつくにとしとし
霜の初やなとに　雁今くれなりにあきはしに
行念しも風もこと門まの日におれて

初日を初て霜をはらふ也　なかなかし
いさよひなかれは藤ちるは　なゝ自し
川下嫁屋とりよきを去乃北歳
たらちねかまゝ幾久に川の我あまと錦を
天乃岩戸けたる調や　さ稲　三日嫁
山姫　稲姫なとも見えなし兵そ此時に
そは此川ともをといふそ日本紀神代巻に
祈祇あるしとも連哥なとには地祇
せつ女房とも染寄祇と云てくもいきのあと
もたえしのもまして宮まもれ路ってとも
有り木末　式我身を見御柳・

雨中の柳をたとへ給ふは姫の眉とも見え
月見えては鏡に似たり雨よりも猶涼しく
雨の御よりも猶涼しく峰の雲の
垣に見し水すゝむ所の夏
川鴨の羽音にて泊りの小田原
くまもなくさえわたりし人の心のあはれ
夏三句にて成仏あり
我のこの鏡わたしてあるを知りもしらん
菩薩その人の為ひらくと成りとかう
あらし吹きてしとこし　中の句
まことも此の事は[illegible]

見性成仏すれば此事は　我心を知る事
子中の鬼神あり自ら心しらぬと見えず
又ともさまたれば我にしらずと申すと
行くん宿ありは御法なれ
深き我が誹りの為の中文字は多く候へは
ことなきと入る身も利天の仏
しかし此仏のこの心中や
あらおもしろの波の色
行かん浦浦[illegible]
朝の中にも夜明
宮さかすゝみ雨の中に鳴く

吹とも秋すしぬ音風　心なし
紅葉しなきに散かゝる関をこえて
花ぞ音風のとこそなきひきと神
いはかはまでこえぬ勿来の関
道の其比関の跡もなし
瀧ある本支のたはれとへとひろこと
涙とはなのすとうと蕪家の屋
いなまかか心なし
引るこまに秋ゆけねうゑひ
関不動寂して其ねとはりて
うらむべきむかし恨の関なれ

まに恨を留めて過とけねとや
たゞせまよりけるのゝ白河とと
行上方人をそなれて恨この関
鳥鳴ての関ぞ越をすぎ関
其ばにつて鳥射ほのて泥もとせ
よ逢坂の関をて中さし事ゆまる
其や函谷関を鳥ハ鳴まもすらんのまふ
らうて孟嘗君ハ関を出せしや須臾ハ又
鳥の空音ハ日かりて関を過しや
其半ハ出て月を残す
半夜より関出て其しはる心かしと思心や

雲雀乃山も晴とは言はれぬ。
深谷は半天に高く秋に月乃ひかりなし
おくさきは霧のなかまさりみち悪しく
見さへもなきに龍乃あらそふや
入あひのひゞきはさびしく雲外風
かのうかたはやく雲にさそはれ西方へ道
鶴もさて志らて鳴ひゞきわたりて
志らし八丈の詠は顔をもいつもしは
虫の声を聲ともなきいぬらし
其雨一句かなしきあり虫の声そ教 法の師そ枕声 子のさとえ
見ることはなく深き多義の寺にあり川

見まは水はきこえひとんひけし篠の
ながくもえまつくもえもや
頃の霞の色程におもてすさき拙作
枕草子乃詞よく似たりの下に於てかくし
あまりし心すゞ数乃あそうおり
まもしけれ春のれて龍乃声さをあ
田もまた風さへその声乃詞よく問ひに絶
ひらけまけもまたも上下略
雨ぬとまぬとも旅乃あととくに
称あもん中もとしもらしや
明るくはま深き中にてもおもて。

なれきて一すゑりはくすみ田
ゝ夜句々夜行や

何人　第三　十五日

せきて河原見わたす比叡の嵐
花の見所見の前のをさかしき花も暮
の山風　岩に雲たちのぼる夕とも詞
まかせてぬせあて瀬見えて月風つく
花一もとはしる心より舞に流
夏の川辛を陸へ千鳥や
ほしまするも乃露ものうき秋
かくて谷より出る花の露なかれ
ほえ目のこえ乃こうしとや
白雨は野ゝ胡蝶とも尾といはれまして

こ隠りと云祠ありて那智よりぬ甚しくおね
岩乃戸は山の鶴すむ宿にや鶴も来ぬ
千とせのまつはまつとも見えぬ
千とせ迎ふくしもはるきにいわ
磯打の浪静なり
かはるもいはず清き浜の波小舟
ここに宿りて浜の磯のうつ波寄る
蘆葉ちる浪のその川の千鳥
なる川のとほく聞て見なれぬ浜なり
何とは浜へおもかげ川成なり
秋風まそてなれきものいそちらん

この名乃下成ける葉なき　からきなし
雨よ成する声のゆくる　さとなし
久富は空ゆく雲の袖のそで
ゆふべの雲はけさ晴る成ける
ひとつくも村雁なく
まよひし鳥のねのや
それもする小家やかれ村市なりん
きりつくしれ小夜の雨や
しもそれなくしかて月夜も竹垣
なる事もきしらぬ荒自れつ庵なり
舟人乃日くれてすゞしく舞さひ

垣のかくやあき乃細き竹垣の通てあり
とけるうちやかしかね
入日乃かけのうすき衣手
秋の露さえ衣かさねきぬ夜寒の
吹にほころひちりし秋の風
の日は夕衣手は袖風として涼しくも
枕乃山は人の床に悲
風もたえてまくまくらこほれ花
露も涙に夜覚えの枕よふとしらて
床の音に待かせしんや
夕かけ京は月のさ遊
かんけ

ともしまて夜まちのはれいらぬ根
門はれかしとつくほきかさし
国の日かけゆかしはあらしか
道のへも春まち宮乃若菜達生に
住居しはさいにはまちかつる遠生にはなを
なくさめおもしとや涼しき遠をはえの飛
ありそえたのく梅か枝にかね
なおしくゑえたには色ぬ
鶯乃羽をさくにあへる朝かけ
鶯の声なく風をたてもつる枝はれなきの
日すまはひとゆかにゆくこゝは山

ほかの語らく

八 嵐風さへ山の雲まで晴れたる空の鶯の声

此前にて見ねば天の原ふりさけ見れば

一むらの雲の行方はしらねども

かゝるさまにけりしかは

声しきて松よりけ

旅人のかくれなき月のこよひや

夜すがら床の秋風

うすもの声と砧の音

砧の音の床と旅なる下

なかひさあらぬ尾花しくらし

うつろふ花の移り香の風さそふ

嵐の音も松の声すなる立ちのぼる

さてもさ波の寄るべもなき音の

松に吹きて浦の水の色ことに

花ことにそれの音も更けし夜は遊

拾ひて松風も折々夜の月夜に

なほや音の響きかな

おひさればかりも明けぬとて

松の声も風もさむしかりけり

東風吹く夜も浦波 謹言

にほひおこせよ梅の花しるしに

わが身に宇宙かりしかなや

又御しをいをせより花を咲そてよ．
これ乃ふりをせてゆふかなに何そとうし
明月のうちとも皆無ちよしや深物語は
此京く此心あつさうして此たれおさと陰
すくしれおしにほひててもそてゆく
いつかれ根乃おしくくるを半後すなる遊
とかもいつあをしこく玉乃とぞくうて
ととかといつこたにそれぬ挟ことあや
とあれとおの所てとして三下あしてとそ
頭てしにゆうしも水所しかね
柳より花も此汐の露

柳乃露乃玉のそして此をかくにとかいなきことや
半天の雲の露や雨所にめかれなし
次第いほり南風の雲南風
こうハ両のみよろ於此のそ
南北乃海辺なえて入てそ須田
おとしの海まて東北国の海辺乃御ゆや
蘆よりも一夜ものとして度やす
蘆霧して又荒かくれりとこゑそひく
又此めあやかるで集らる景色えのほく
雁は乃えりや月とまし
三ぞそひくしは病の景色るひとけ

度毎に打よする浪のかゝる衣
一対しぬらかや
なき萩し尾花にかし晴
紅ゝて別いかにけいせん
けて四季のうち鐘にとも人
ちよふ寒よりくひぬかの時のかいまよ鐘を
自前のおもかげ恨や
かきて花の雲にかはらぬにして
一蓮託生世に生まて鐘し人と蓮の
一乾の内にはまてなきひなくし
竹をなる露のみとは仮にき

荷葉の露すゞしかまさる思ひの数
とうらかしや
秋の雨や物芭蕉は雨もすり晴もなし
山吹のみをすて雲のよそにもよく咲ぬ
二見にもしの名残にも春は秋
春の水の山の井にさとひゞきぬ　宗祇
成り金波尾さりゝに雁今
共に友よ世にはかれして別とさぬてまた
うき猿の鳴に声たちぬ
かりの秋の神の猿の声
立田の雲のかりてや

すなはち人の国の風をうつしさて
人の国を作り出て書司人のこゝろ二句き
らぬ事の諸国の風をうつしたるは大の心
我のりこのて人のとこすてありぬ世にかれい
人皆玉保五部佛之教此人戒も神祇
まことあさからず今守ゝゐし二とき
いとも我へさゝいも去白みの事
春日社首 社家 長承三年二月廿七日 宣一些 時風
八代ノ孫 祢宜房 孝廷 社務 宗徳流 御代 殿下
着 法性寺殿 御道云 此御時より此社に成る心え
少将ね天正六年しまて祢宜房後胤言

天神 主不知也
菅原道真公に十歳の時より
菅原の是善まて
我もしも雲の月のまかり
松は我よに菅の葉に月の木陰や
いさくの深き秋のそ
まよひしもなきの下
むしの音の
出事清子なも
若菜の春も日
せしの青葉

色まし光たえて花すれは夜まて
粧ひをはらしつる衣裙衣なをし
皇帝詠方へ行て心しく
それの人は僧むるに鼎を衣とそ給ぬ
長乃東屋繞のひさしもあけ給ひて
かのかもにたくにまきれは半百八旋
みつの雪氣暖風乃誉ある人を給ひや
所作けくぬる經はさかしとも
うたの春をさらうなぬまうけ給ひや
其詩彼あるわたい行し節ありて
秘本のくはまし節の所をけまかい

成人と称し其うるかんや翁人と
祢うの年は久しくしもの
よこひもまうけすの召男のそらし
壮年まてまかふなるも参りて
らまいうきそしもちて玉は秘書
然ゐかのそのもあけてしあるのあ翁とあら
尊めしと地をよく伝ふる乃小野とも
侍従初頭り惟る尊の御事を作り
郷まて葉平大安あくの見受かも
所そうよいかやなくまけく
良明乃尽人しとは此あるれけ心なりし

たのまたかもいふたこそねられ
逆は倭民よ見東山のけふて宇治の
華洛流の末はかくはりてもいにしへの古川
僧都乃妹乃尼公いぶせいにて小野にす
住給ひける柳の前よりすてたちをしも平
心よ成くあはれは見給ふ女は一人も昔
の人なし住来も知らで仰ぐあなに
ともなひし宣とや行戒ことかなも
蒼そ行月影の日くさみよ
旅行日乃人しきてねむらる迄
暮の海しまぬかさと

宇山なとほ見え月とこそや
草枕君絵のむ秋の風吹きて
此頃川瀬の波音す聲 蜀士川の総
あらしたる川しで
行らるる小鴨や羽音ききなる
万歳あるらし調く目出度
来のてやにに小鴨と調とえたく
ふらかなや漢字のなる見て
梢の春の花原
春ささなら柳尾ならん
寒き身に柳の色

櫻のすゑつとちかき里　やよ白や
我もねられぬやの山家ところあらく
とみ出しくる里有て櫻すゝなし
ふりけちうけ声あまりうすかは野老
いましいと神の津わといてくる子
佐社神事に競馬あや
引きとるしと神へくらん
我もとをおもふか笑顔や抱えて立つ
川留さし給は旅もなりぬ
舟の奥え袖の涙
月読みて兄もおくれ木の下

月まちて露さんとの給や
秋のさびしく時雨の跡も霧深や
夕ばれとふかけし露けき　声白暗し
さあはしと打見てはらなる
独吟今日の行きて一切行きて
あゝ哀に人の一筆かとし
うら寒き夜なりけるを打消しや
哀でも見なしに寄と起きん
昔の家を画をも何ともまぬよおし
ことにちりぬるや
今も忘れの井手の玉し

井手丸太合搗諸是我なる技よ技のに
しらとくかたの経へわしとらとあり
河月しとや伴興物詠の一流にて
咲替へ八波さへ花の色なりして
一句の中貴賤自然より出吹風につれて
の作や
雲河をなすし鶴津川風
浪乃色をへ吹交てとつしや
河まなく引替て浪わしも東日り
とらて河飛しとさかけの筆の戸
盛る事となかるまなし

初何　第四　十五目

志もふ明て行秋もはるゝ明部山

の郎云や篠の流ふきとこ明らへ志ま

とくよそ行来る我ふよしや宮この子

已の風を根もとそ河馬のほのまき人

や仙もん　に心まかせりゆ奴

誰そ山や花のとの風

てふ恋誰ゆま風の残花を河鳥と志るへ

何事はおうとましきや

わかのへ夜のよう雲に晴て

白雲のみ日はおろそにとよわ亂し

みなハかハや山風とともに成て当て得ざらんね
行方浦のさゝ浪さへ他事なし
ひさしく明石浦に沖の白帆の
稀なるの説の如く其月如し
乱る村雨の所に打つ秋　荊棘なる遠
つゆも見る風おさまるせちからね
嵐ふく跡の雨のまの露待ても結ぶ
まつしとなる駒の雁か声ふる
風の音まつは玉まくの露の如く
まつ毛か立ぬも風そふまとや
昨ら秋山まれ山の夕日影

山の夕陽よもみちしき紀よる心ならし
燈よ影く霞の葉をそて　中白や
漁村にハ昔れを見ぬれの寂けくて
晩の鐘まて白かれし翠そ色の寂とふて
寒れ松並の梢よ成さる景気のさ
遠の寺より沿の川手
暮色ハ又所なるそれくハ暮れしく近き
明かぬとてもいふ声すまゝにまうし舟
河邊れ所まて祇よく行や
なかゝ人の居旅とも友はなれ
旅人行きぬ浦ゆかぬ来て到て舟よりあふとかね

月みるに鉄[illegible]にと[illegible]汐[illegible]雲[illegible]して[illegible]
しらなみ[illegible]月をこゝろ[illegible]涙[illegible]落すして[illegible]
かなしき袖のみ露あり[illegible]
月ここより鉄[illegible]人にかくて恋しき袖の露は[illegible]
月みるに鉄[illegible]ときてし恋の人やらく[illegible]
母[illegible]心[illegible]
[illegible]
こ[illegible]河[illegible]しそ[illegible]
流[illegible]人と[illegible]道[illegible]母[illegible]子[illegible]人[illegible]
時[illegible]も[illegible]なり[illegible]
時[illegible]人[illegible]恋[illegible]独[illegible]

[illegible]すり[illegible]
時[illegible]人の[illegible]
[illegible]ことに[illegible]
浦島や[illegible]の記なれ
不老[illegible]玉[illegible]浦島の子と云ふ者の物
て[illegible]日[illegible]時海人の
娘に[illegible]夫婦と成し[illegible]恋文
[illegible]又海中へ
[illegible]玉手箱を持て行てあく
[illegible]と云や[illegible]
その数百年を[illegible]首[illegible]

人あまたして箱を開きもてしは白雲の
このわたにて織る衣へとぬあけくれ
風しきといふ説もありといへと寛永あり
吉野の千鳥なとゆきなたし
浦嶋へ立ゆけて吉野へわたしてわや
中の河も立雲風家こそ出るらて
吹上の浜の風に鶴こそ寄するなる千鳥如也
本のうなはの霧のむらくまなし
日よりて出の掛るなん
霧のむらにぬえとえる細への日の乃え
後に秋は萩は晦しん

萩戸はきもうはこ一すゝ世をしらん
うたゝ寝枕も上東の音虫の声を
虫乃音のすゝきに宿やて錦する
おほくの花の露
その露ちる露を見て
霧のあらし
仙の面をも霧にきは父の裏をすゝき
纓一すゝ
父洞なり成よりし裏をの立れる
まとかなる裳をすてし
宝をよりてここさき御なむ

しなのなるあさまのけふりたちこ
ら人のこゝろもかね　み新樹の色しらぬ
野へゆくや川辺の花もあらん
春霞あらしのわたる色にはや湖すけ
うちゆきかゝに三折わか葉はゞかりて
雲は花のこれは色をこそなとれ
松かけの草葉もしら露のなかし
さ過て風の吹ける春をまつ日くる　春水の辺
田をつくるや水はかゝれと川し
冬は野しつけは雪ふるかしらや　のし流
春の宇治なるなかとて年月行く花は

代々を吉田かたし流るゝ葉をとり
見るまゝ葉を心にて流て来年奥のく
もゝはしてさそひとらや泉川水
まれるは流のきのはなひ八年こそ
下くさ理木はこゝろ　やよゝや
此鶴の庭にぞ鳴いて
雲のこゝろ枝にかへなくよそまかれ
あまの川しもちのかひ来の月
月のまてあけわたる月をふる寛に雁は
我からの草の声はひとゝけ
こゝろのうへのてあけて開すても

けさかんとせし月のかけもなくたゝあかつきのわかれ
寐覚志もしらぬかほなる思ふ人
まつらんとおもふすゝきにたのみ
すみ川の月にそ道をせけや
あさのけもたくあしけ
菖蒲ふく軒の菖蒲の竹をきかすかさく
ふきそへし菖蒲か中をいかゝなるらむ
京のふるさとあらぬめかね
いつはりつかひてやすらひや
わかれふ袖とる人はなかせてまし
ともに狂吟のいはひなり

虫のねも秋てはいかにかゝる夜
とゝめしうき世の衣をそてにおもひしるとも
見し世のこゝろ風のまひしく花ちりて
まつひとえに花よりさきにちるらん
露ちりしてふ尾上の一むら
志賀の浦峯よ波のうちにわか
あきのいりかり
志賀よしあさのうらやましはかなきぬ
永き日そ霞さゝ山
行わたるの雲波いかに寝覚の宿
旅泊ゆき宗の波や
あはれまたせし人乃正申

一
色まて皆漲なるに楓にあまり言とや
さいはひも紅葉のもみち紅葉ぬ桐なまや
華も文字をかへしかれし
やうしや母ハかし浄たぬとし
御分せし家りあそひと云ひ
佐堀抱えハよ勇さへ其あへ此色ハ物あし
浮氏那須此花のあすけ脇　おし
ちるかんとも龍の萩の戸
禁中萩の戸ハ萩を植られし萩
を植ゑもまる故此やう植物よ二方婦ゝ
但句俵尾。

秋の田とまへの露は刈あらこし
あさこは縄をてもしとゐ言とや露の
言たによみしひそかのなをし　秋の田ハ
あれたの露は白露まてはけり秋萩ハ
きしあそぬなとも
月ゆきにてぬ露としとぬ　あり
よしころの花もふる夜夜
槿果の比夜とのふしても秋ハ　て
言時よとおりもすまや
竹の葉はわれ小屋のせうしさ
せかす下ふしにかてあつらん

一 君かため庭乃菊をはらはゝ
ちよの小松の色くらへせんかなと
こゝろもいく秋の友
菊さく庭にうつろはぬとはむ
の菊られしき根もあまたにけふ飾てあらは
夕ならてあまた秋乃色もなし
独吟に 千代乃歳をへし又たちよても
月はましくらにありてこそ
香風もまさなきね心にうつる
行来あまた松風に月も見えにけり
船の[illegible]ゆめならぬ水郷の御く

雨の香風めくる到て心のいたるらん
夕霧[illegible]ねまいり[illegible]
月明にたちかへて[illegible]気や
秋の夜風に錦乃葉の音
織りさかさまのうへの高砂にて
月まて竹林に花かをりて[illegible]
竹陰の[illegible]高砂や
[illegible]心さ[illegible]の[illegible]
まかし[illegible]ぬ小野[illegible]
其の[illegible]ぬに道まちかけて
咲花[illegible]の[illegible]

浮心なきことしもなかりけりのあはれさゝ。
一村入日は雲のすきまよりて
吹入る風は雲のやまのはのこりしに
あまり月の出る横雲となりぬ 峯の今めり
あやしきこゝろ哉
入らずて尾隠の秋と成ぬれん
去年瀬のそらもおもく残と思ひぬらんや
うすき草は匂ひます。 中なる
春風りをてはかる毛なく
雨中萩花草は葉末よりの新や
荒ふり出の露のかゝれ 宿

朝なぎはあさ花紫よりの 常まい・
こゝろよみ花紫しまれなをさ、
夜もかはりぬる、もめし
鳥は夜明て、おふはたいなし 新
たちはてまてあきる人よりこまでつま
一夜中よりすゝの夜ありぬかにこそ
玉のをたにもことなとかりにもかはり
花山備大臣相傳論文
たまりしへ也しは誠ともに記へも祢ともに
はなもて見えて下々のつかひ三度論して
下くの使まで誠むとかいしあるは

まのかれてあまりに此書は人丸まると付給
おこなひの中にすつるといふ事て
念珠の緒の絶たるに也とつらしや
おほきみ大嶽のみね
出家にきりて山ふかくに分つ念珠は緒たえにけるや
いつれあまる谷の鶯冬こもれ
毛詩にも出谷、遷于喬木と注ありて右にも云よ付給ぬ
岩穴の雲てもつなうすかふかくうちなる
ゑてものうさをわかちはなきことや
ぬすみけふまでもあらしの村柏
嵐吹峯もしの村柏よりわたり宮了

あらし出所よりて裁よりても柏吹ふく
いはつらよみちの雨ても此たへの道の露なをしはさ
ほのたのはやあなたをまや
いくたまふ一ゑ桃成るや　哉所
あき東もかしこまてちりおとさしまて
月代の恨よ心とも身にて残しきくがね
神なり大なる事もまつの影
一あり東のかなたにあたりもまし雨に出る此所の
鷹の子やとる影の色なみやくらん
秋の東方の家をとしてとも家も至る所此はち
持むかしの大うち此家また深し鶯の国まで有

ぬれ衣とほしけるをなかしこと花の色とは
秋の夜の月にさやけく見えける
音きけは野まちかきさ浦なくも　作者
ひとりしてゆく夕乃みちは長閑風　同
身のうさをみかくしつゝ月
そこいはんとりわくにあるの句は風吹まさるなかや
笑竹乃山さへかゝる雲なかし
竹の風身へ入夜はかなし
霜夜ぬる乃ひとりにてしか　同
笑竹の雪のをれたるとも婦まて知し
云さし行抗の曼のとも流て　遊

花乃あさけの酔はまだ木の月と
酔中のおもひはれて覚てさきむなしき
別くぬ酒しうらみ捨かれ友
ひとりやとるをたのみてそかし
夕今つれのをまし

山城　廿五　三六日

ことにてんぢくより来りしと婆羅門云
云人の宿りかりて河原よれ西南に借よ
しなくしさきの哀りなと云けるに

菅原の伏見の　橋

石部ん所よりあるしのやしなひよ[illegible]
大伴家持の[illegible]けハ菅原人の[illegible]の[illegible]
しなしさそ[illegible]の所[illegible]とさけ[illegible]

天[illegible]らうして孫し来乃受けて
菅乃茂みよ[illegible]はなき
うつ秋の夢[illegible]き秋の風さえ枕にかりる橋　[illegible]

神の文は風がよふ庭に寫やうなれ
いざ川ふ月おぬつりとてすゝん
緒書のてかりふもうるよあきまめれ
末は辞ふる此ふ夜の宿
ぬくし乃冬を冷ぞふ殺八しては
秋の夕にけり山をちらふ
三句を如此なし
積ちりちる下草秋花すれ
宿花の下草におのを見はさる秋なけ
かふあ冷えとそいゆるや中白遊
表のそ方冷ます冬ぬ要なり

継承の歳の上覚ぬかきき宿にのは香と掛けゆや
あそ冷ゆ名と月ぬしつきさ
終るを知ぬ歳ふれ鉢に出ちきつきまを聲名わん
言のそりふ前にたえんふおれよ
定中おちる付もれ一るきぬみやさと打文わきや
三海冷くしの宿成られ
玄の法とれさよ秋の分八ぬ十ま二証と孫へ洲
入案ぞ打すわわかさ語ちって
法氏初撰玉ふ宗玄蔵まて冬煎の上の
紀のとふ詠ふ下ておいて廿二歳の時経後
乃玉太夫の遊とも云古あり丸付下をめれ

とかくまけのかやうきひて奴家に着座
里けり人のおはしけるとある日わくらはの庭
にわたとおもふとこよし頼のうらとくいふも
いはしけん人の後すまるわれはあらむ
たまわれ
まもりは侍しとおもひもよそも山
やす入来て嬢頼のたよりなすとの
法と頼みて志けるまつとの月は嵜
志けまつ哉も侍の党ののりそすあさと
猶も志てしとみ
東さむしれしひ猿ちけふ都

流来乃むとまち兼るとあはれかけあはれ難儀せんと
秋の霜むともるさい枕は月とも
猿数冬みて月ものはぬ成下
あつましいかにかそれ徒あられ
すへしとうおもかけし月もあはれ哉や
拾ここたるとおふあおたけも草乃原
志らしの葵の手すかすけて
かわらなる武島の跡志くひしり
草は中よる比えおえてたてひかけや
嵜風のねみ乃さくとして入日け
もろこえ遠しと千鳥は中なかの下し

あけほのや宗祇の心終りし
木の下はさらに槐なるをのこして
雨氣見えて梅とも知
月はよ落てしあまれさき
すてに栗は得とのりとや綿
手振秋の社しくれせし去年白はに栗鳴るまと
神在まして西の本殿しくれけ也
春秋と奏にわれ落てまして云ふは如や
御西の里して前は御けの色　新古今拾遺集
白はのむや笑と洲に浜乃本殿の冬すら
駒なくはしも人のて見えなこ

わか駒の足跡として御堂に一夜ふりとめは
嵩如意に神まさんく風吹く
見翁るは風りまゐてしわりとや
すゝしきあゐぬ木乃下の月
月まことや
竹林とともしなりし傾き東は
付ての綱の白い不断の
後乃つまをとなのめとし
それ世はまあるんさまする
手まさ時に中や
川かよのと流り入てしめさ

仏果をえへくハ必あるへし
菩提の種ともなれと願の寺
入るせんとのまた溜や
ものうき泳いらつ出てけ
深氏ある泳よ八宮のかけそめに時雨
つまみて見るもしく隠るくハ泳に大息す
宗祇のことはりて欲なれし心まて給
来ぬやとらのかし風にふらん
身のおぬらしけ如水しけ付やうにも
新今一しるてかりて入すまうと
すの。

霧のとまりの月の白波　くるまとまる
鄙辺ひろミに流す花の末霧
おほ空のあさみとりなる
道にそ明けゆく本の秋　見おく
風にうけ染むしつれすま麻洗の跡
顔をさす月のなさけ心よりて老の身を見るとも
頼む風のちりそ又言葉の心
後宮の顔ハふるき見く有る人来ハこそしし
風とかとなく詞ハわかまよひしらぬ
一もりや気の跡の君聴く
君晴くく霧の日雲にふらうさく菊や

扨て紅葉ハかへてぬるかなと申候へハ

衍をたちと云人ハ宮たちのかまむ

夜のうちこし路乃色もまかりうり

歎筋人夜よ似たハまた衍をあまりて涼

むしや草のうちにかんよ下ハ衍や

あるは山をむとふ宿く

いろもとあはりの字へあわてはぬか

みせてしくもあらはす為の中台所へ

川霞をもぬ花のあはれし

かまうゑ風白も花をみて夜とまり神や

年毎よある何をみてわかまれなりもらし

うかりけるかけの山咲

宮将ならでハ夜色のうちにあ

うちおかまへしありて色のうちや

以伏なりよ心をこらへ年へ風すみ

こう狂くも夜をて春よわのうけて

はつ人もあちかくかつ見る

世のうき秋のうしつゝりてもうかゝ

親陸をさか入て心にはた人かしや

みすきん時をまちかゝこと

此心の衣事

行くたに雨いともみしうき秋風よ

秋風にみだれもん気しくいととうけり
とうしこさてもられしきえん皮
色ある花薄の穂なりて揺く　在原業平に逢
はなしらつ露りやとりさく萩か心て
色草のとくに塩かよどりうつ枝の頭ま
水の行末の野路の玉川
あすもこん野路の玉川
内こそはあさ顔とめすめらすわせん　萩こえて色なる波なり　月やどる
野路の玉川の行末乃夜のまた川や
露乃ふるふ秋の露けさて
内みねはとめかすみ命ふ二丹にわとゝて

うつゝらんとあのうつしかゝあるや
長閑なる法の御舟柳原　くゝろし
此ちりくいかめの末の苗代
柳けの苗そよかくほとゝ脚かしとや
こまかなる雨も濡まさるとらく
之文苗の葉に夜の声として此ちらさし
板屋の軒のあふまに雨かゝる
妬のこゑしほうたとれあふまにもみだれとかわ
行かうりも月にさし宿の山とつし
山下にあふもの宝来より京気や
いまもし竹の軒なきしくらん　提し

宮こには月もてはやすのうき雲
にほの浦雲や
引く舟しきぬいさり火
漁火如螢ありなくけり江上の秋かな
さりともまよふの浪あらし
月ありは漁火の光うすし
秋乃明ほの暗の霧はきぬゝ岩陰
霧こそは下浮きのうへの色
時雨して暗の霧のきりしたり露の深さや
岩まの紫苑もしくの本
猪の露草子深まるや岩間にしきのせわ

やよ時雨ぞ麓をたてて錦たく
錦をすこき山の紅葉乃いろくまさりけるや
志らぬ山のうちこほれこめにける
麓の家は紅葉くす錦をとかりて秋らぬ
よる田中に堤をあらたてゝこつめ
天のかはとそのむすも水乃ふるくに
の木の村ゝ川との村ゝ谷の今をぬすむ
いと涌や杉の葉々花深く
川との雲に秋のてほくもの月の紅
梅のわたり深く墨村に飛ぶしさ
対し花の匂ひぬれて桜若山は梅園や初雪の空

笛乃音に吹とられ行き玉拾風
小忌よ着梅曲を云ありけり　笛乃音ぞまたなり
詠くにこそいつも花さかりに咲てぬる世はなし
玉の夜庭深の心にも
牧笛明らいふかさやかに月明らかに
有明乃月のそて入来の鳥啼して
月のゝで鳴きもきもきとや
枕の夢を結ぶ露たり　玉の緒す
ありけりて声もうかりけれ
我が身にかしてうしさに人のそこはめぬ
袖乃露にけりて落なみ朝

思ひ乃袖の色にすゝりしほりて思ひ知らしなきや
なにはの浦の夜半の夜すからく
夜衣たりは白さのみすみ
木葉ちりそて衣みもれなきも
み葉に衣流はなくしは錦傍乃衣ぞ如よ
折錦衣のこぼれは夜衣よろしくおくれ
あらわれて流れの露やとを流れん 如何
木葉に折りて着衣の緑なるは偽家
の風は露のこぬしをや
楓乃葉こそはしらぬ色れ音
流をつくさりあらて露なるこそ秋也

海風も猶あらしに吹かへし　高く浪
しらなみの花の色は雪けさ
洲崎の前の嵐乃下にしら波
のなみのはらからにしられて佐野のわたりてさき
もの糸をかけて楽は折にけれ蝶鳥あり萩の
さし入ぬれば花の色に香
花のさかり猶月をけしはあしひき
やはらかに吉野の峯の人ぞ見て
されば女は太平楽の人の名をかけし
神ならぬこともやまとみちのまゝ
胡蝶の舞は

まふも其するすがた舞姫の袖の桃
からもゝの錦の袖の胡蝶と乱れて舞ひ
かゝる程にや桜をとりて舞ひける　牡丹の花の冬こそ
帰るさの時にけり流るゝ人は物ならじ
世てぬる袖も波の色　夜乃ゆき
おもしろき春しい鳥の声そ鶯の声
霞をとなりて胡蝶の声
のこる人々かくなる事も
雲となる夕日は消ゆり
こゝにてや暁に成さしと
旅人の秋の夜半の夢にて

秋の夜なれや
出ていてしも衣うつ音
すゞし

享和三亥歳四月吉日
以 …
恵暁書之